

オプション教材メギ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

2.

3.

4.

5.

昔、夏に食べたトマトはおいしかった。一山二十円で八つくらいあり、お菓子類より安かったのでおやつによく食べたものだ。今のうちに、全身見事にまっかつかのトマトではない。ヘタの周囲などはうす青いのである。いかにも野菜であるという、庶民的ムードを持っていた。それに塩をふるだけで、切ったりせずにかぶりつくのである。

あのころのトマトは臭かった。だから厳密にいうと、今のトマトと昔のトマトのどっちがおいしいかという話に簡単に答えは出せない。

昔のトマトは青臭く、特に種のところのゲル状地帯は臭みが強かった。そしてヘタのほうへ行くと青くてガジガジで、もう食べられな。それに比べれば今のトマトは美しく赤く、臭みはほとんどなく、肥料に砂糖をやっているんじゃないかと思うほどあまい。両方をもし並べることができたら、今の子どもはいまのトマトの方がおいしいというかも知れない。

だが、昔のトマトの味の中には、夏があつた。あの臭みは、夏の臭みだったのだ。そしてあのトマトは、生命感を宿していた。

それはしかし、好みの問題かもしれない。だが、好みの問題ではなくて、はつきりと、昔の野菜にはあつて、今の野菜にないものがある。それは、旬、という概念である。

野菜や魚などの、最もおいしい時期という意味の、旬。

今、トマトはスーパーへ行けば一年中ある。だから、トマトに旬はなくなったのである。年中いつ食べても同じ味がある。

キュウリやナスや大根にも、季節感がなくなった。白菜だって、夏場に手に入る。ねぎは本来どの季節の野菜かというクイズをやつて、若い女性が春、なんて答えているありさまである。

ハウス栽培によって野菜は季節から離脱した。それはある意味では、進歩というものである。

しかし、便利を手に入れたとき、我々は季節感を失い、旬のもののおいしさをうばわれたのである。せみ取りに行つて、麦わらぼうをかぶつて、溪流に落ちてひざから血が出て、でもカブト虫をつかまえたんだから大満足、という夏と、昔のトマトはびつたり

結びついていて。夏の午後の耳せんをされたようなけだるい静かさと、トマトは切りはなせないものだ。たつたのである。

今でも、たけのことか、そらめめとか、ハウス栽培をあまりしないものには一応の旬がある。だがこれも、輸入物が混じつてきたりして、本当の意味の旬とはちがうものになりつつある。

魚介では、かつおとかさんまとか、一応季節と結びついてはいるのだが、養殖のできるものは、一年中はまぐりがあるように、旬を失いつつある。

そのものがとれる本来の季節に食べた旬のもののおいしさは、どんな品種改良したものよりも上だった、と思うのは私が年をとつてノスタルジックになつていいるせいであろうか。

(清水義範の文章より)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

あなたはいい加減な人間だ——そういわれたなら日本人のだけれど不快、どころか、腹を立てることだろう。わたしのどがいい加減なんですか、と、ムキになって反論する人も多いにちがいない。ということは、「いい加減」という言葉がけつして好ましいことではないことを語っている。しかし、考えてみると、これはまことに奇妙なことではあるまいか。「いい加減」というのは字義どおりに解すれば、よい加減という意味であり、つまり、適切な、ということだからである。したがって、いい加減な人というのは、ものごとに対してきわめて適切な処置のとれる人、感情の起伏が激しくなく、いつも平静を保っていることのできる人、過激な行動に走ることなく、つねに節度をわきまえている人、ということになる。にもかかわらず、いい加減な人間といわれると、十人のうち十人までが憤るといのは、この言葉がけつしてそうした字義どおりの意味で使われていないことを証明している。そこで私はあらためて辞書（『広辞苑Ⅱ第二版』）を引いてみる。すると、「好い加減」の項にはつぎの三つの意味が記されている。

（一）よい程あい。適當。

（二）条理（すじみち）をつくさないこと。徹底しないこと。でたらめ。いくらい。

（三）（副詞的に用いて）相當。だいぶ。かなり。

そして、（三）の用例として「いい加減待たされた」という用法があげられている。だが、どう考えてみても、この三つの意味のあいだには関連が見いだせそうにない。「適當」と「でたらめ」と「かなり」に、どんな共通項があるのだろうか。まったくニュアンスを異にする意味を三つもふくんでいるとすれば、「いい加減」という言葉は文脈で判断するほかない。おそらく、日本語のなかで外国人に最も理解しがたいのは、こうした言葉であろう。時と場合によって、その意味が異なるどころか、正反対の意味にさえなってしまうのであるから。たとえば、子供のいたずらが過ぎると、母親はきまって「いい加減にしなさい！」といって叱る。ところが、そういわれて子供が「いい加減」なことをしたとすると、これまた叱られることになる。「いい加減にしなさい！」といって子供を叱った母親は、そういいながら子供が「いい加減な人間」になることを、けつして望んではないのである。

ではなぜ、「いい加減」が好ましくない意味を持つようになったのであろうか。それはおそらく、「よい加減」ということを日本人がいふことと思わなかったからにちがいない。どうしていいことと思わなかったのか。その心の底には、日本人独特の自然についての考え方が、あるように私は思う。

日本の国土は、世界でもまれな温和な気象と美しい自然にめぐまれている。むろん、狭い島国であっても、北と南とでは気候は異なり、生活の条件もかなりちがう。けれども概していうなら、これほど優しい山河に取り巻かれた風土は地球上で例外といってもよい。このようなおだやかな自然のなかで暮らしてつづけてきた日本人は、とうぜん自然に親しみ、自然に甘えてきた。日本人は自然に敵対したり、自然を克服しようなどとは、まったく考えもしなかった。

たしかに自然は災害ももたらした。台風、地震、洪水、旱魃、豪雪、火山の噴火……こうした天災で人びとは苦しんできた。しかし、それにしても、この国では自然が徹底的に人間を痛めつけることはしなかった。一時的に災害をもたらしても、自然はすぐに優しく人間をいたわり、その打撃から立ち直らせてくれるのである。だから日本人は自然を愛したというより、自然を信じてきたといふべきだろう。

とはいえ、日本人も、ただ自然に随順すればそれでよいと考えたわけではない。人間は自然そのものとはちがう。人は死ねば土に還るには相違ないが、少なくとも人間は生きているかぎり人間であり、人間である以上、人間的な努力をしなければならぬ。その努力の果てに自然がこころよく待ち受けていてくれるのである。つまり、自然に帰ることはあくまで最終的な解決なのであって、最初から自然に従えばいいということではない。

「いい加減」の状態とは、すなわち自然の状態ということになる。したがって、「いい加減な人間」とは、自然のままになっている人間、言いかえれば、なすべきことをやめた人間ということになる。なすべきことをなさず、自然のままに任せておくということは、いくら自然に甘え、自然を信じている日本人にとっても、けつして好ましいことではない。「人事ヲ尽クシテ天命ヲ待ツ」とは中国の名言だが、自然を信仰する日本人もそう思っているのだ。そこ

で、日本人は人事を尽くさないで自然に任せてしまふ安易な人間を「いい加減なヤツ」として非難するのである。

私は『広辞苑』にあげられている「いい加減」の三つの意味のあいだに何の関連も見いだせそうにないといった。だが、以上のように考えてみると、この三つの意味はやはり見えない糸で結ばれていることに気づく。それはともに日本人の自然観の正直な告白なのである。つまり、「いい加減」という言葉の意味はすべてその根を「自然」に持っているのである。

だとすれば、この言葉こそ、世界で例外といえるほど優しい山河、おだやかな自然にめぐまれた島国に暮らす日本人独特の表現であり、日本人の心性をこの上なく雄弁に語っている興味深い日常語——といえるのではなからうか。

（森本哲郎「日本語 表と裏」）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



ドイツにエーレンベルグという有名な生態学者がいる。彼はあるとき、ふしぎな体験をした。第二次大戦が終わってポーランドに旅行したときのことだ。ふしぎな体験の主役は、コメスキというイネ科の植物である。

コメスキは、日本でも浅間山などに生育している、ごくふつうの植物だ。その植物を指さして、ポーランドの植物学者たちが言った。

「エーレンベルグさん、これはもともと湿っている場所にはえる植物なんですよ」

これを聞いたエーレンベルグは、びっくりしてしまった。なぜなら、コメスキはドイツでは砂地だとか岩場などのように乾いた場所にはえる代表的な植物といわれていたからだ。ところが同じコメスキをポーランドで見ると、じつさいに湿原やその他の湿った場所にはえているではないか。

エーレンベルグは考え込んでしまった。「自分がいままで勉強してきた植物学の知識は正しいものだったのだろうか」

好湿性植物、好乾性植物などという言葉があるくらい、湿った場所が好きで乾いた場所にはえていないし、乾いた場所が好きな植物は乾いた場所にはえている。すくなくともそれまでは、そう考えられていた。では、このコメスキは、いったいどちらなのだ。湿ったところが好きなのか、乾いたところが好きなのか。……彼は迷ってしまった。

ポーランドの旅行から帰ったエーレンベルグは、さっそく一つの実験をはじめた。

彼らは実験農場の一部に、五メートルの実験圃場をつくった。

まず、水を張って、水面から上のほうへ土を積んで傾斜地をつくった。

水にもっとも近いところは湿地の、水からもっともはなれたところは乾燥地の条件を人工的につくり出したわけである。そして、この傾斜地の上にヨーロッパの牧草としてひろく大陸各地に生育している五種類の牧草の種をまいてみた。

最初は、五種類の牧草をそれぞれ一種類ずつ単植栽培してみた。

すると五種類が五種類とも、乾きすぎず、湿りすぎない斜面の中央部で最大の生長量を示した。競争相手のない単植栽培では、どの植物もめぐまれた立地でもっとも生長する。つぎに、その五種類の植物が野外の牧野で自然に生育している状態と同じように、種類をまぜて混植栽培をおこなった。するとどうだろう。単植栽培の時とだいたいおなじ生長量を示したのは、カモガヤとオオカニツリの二種類だけだった。スズメノチャヒキという草は、いちばん水から離れたところで最大の生長量を示し、反対に水に近いところではまったく生育しなかった。逆にオオスズメノテツポウは、水に近いところで最大の生長量を示した。

スズメノチャヒキは現実に、乾燥した土地に生育しているものだし、オオスズメノテツポウは、湿った土地にひろく見られる植物だ。混植栽培実験の結果は、ほぼ自然の生育地域と一致している。

実験の結果、エーレンベルグはひとつの貴重な真実を教えられた。

「いままで、単植栽培実験の結果がそのまま自然にも通用すると思えてきた植物学の通則は、かならずしも正しくないのだ」と。

ポーランド旅行以来の疑問が、こんどの混植栽培実験ではつきりした。

自然の山野には数多くの競争相手がいる。自分より強い相手がもつとも住みよいところにいる場合は、心ならずも強敵のいないきびしい条件の土地で生きてゆかなければならないのだ。ひどい時には、コメスキのように、多湿、乾燥とまったく正反対の環境で生育させられる場合もある。

(宮脇昭「人類最後の日」)



エーレンベルグは、植物が生育するためにもっとも適した環境に
は二つの場合があるのではないかと考えた。

その一つは、単植栽培の実験で最大の生長量を示す場所で、もし競
争相手がなければ、適度の水分と養分を自由にとり入れて、のびの
びと生育できる地域だ。彼はこのような地域を生理的最適域と名づけ
た。

もう一つは、混植栽培の実験で最大の生長量を示したような場所
だ。つまり自然に近い状態で、ある植物が自分よりも競争力の強い植
物によって生理的に最適の場所をうばわれているため、心ならずもそ
の場所から押し出され、もっと悪い条件のもとで生育しているような
地域である。そんな地域を、彼は生態的最適域と名づけた。

私は感心したが、ぜんぜん疑問がなかったわけではない。

生理的最適域という言葉は全面的に納得できる。だが生態的最適域

のほうはどうだろう？ 自分にとってもっともよい環境条件からや

やはずれて、湿った場所や乾いた場所に追いやられることが最適域と
いう言葉で言いあらわされてよいのだろうか？

だが、いまになつて考えれば、エーレンベルグの言った最適域とい
う意味の深さが、私にもわかるような気がする。ある生物社会が健全

で長いあいだ繁栄してゆくためには、すべての欲望がほんの短時日の
あいだ満足できる本来の最適生育域から多少ずれていて、なんでも思

いどおりになるとは限らない環境のほうだが、よいかもしれないから
だ。そのほうが、かえってバランスのとれた社会を保つてゆくのに

はよい状態だろう。もし、あまり強くなりすぎ、すべての競争相手にう
ちかつてあらゆる欲望がかなえられたなら、その個体も種族も社会も

滅亡してゆくのが生物界の鉄則なのだ。生態的最適域とは、生物
社会の本来の意味から言って、まさに長つづきのする最適の地域だつ
たのだ。

すべての生物には、生理的最適域と生態的最適域とがある。それを
人間の社会にあてはめてみると、私にはちかごろの人間の生き方

に、ある種の恐ろしさを感じないわけにはいかない。

私たちの日常生活は、いろいろな欲望を満足させる方向に進んでい

る。熱いときは、冷房、寒いときには暖房。衣料、食物、自動車な
ど、人間の欲望を満たすために、工場はあたらしい製品をこれでも
か、これでもかと生産して提供する。

人間のかずかずのせつな欲望がすべて満足させられるような社会
が生まれようとしている半面、人間生命の持続的な存続がおびやかさ
れるような画一的な社会化、文明化も進んでいる。矛盾した世の中だ
と、君たちは考えるだろう。だが、この現象はかならずしも矛盾では
ない。

自然の山野に生きるもの言わぬ植物たちは、きわめてきびしい条件
のところで、生理的に最適とはいえない場所でもまんをかさねながら
も、力強く生きていてではないか。そして何代たつても、そこから
消滅しないですべて生きている。この姿に、私たち人間が学ぶところは
ないだろうか？

ことわっておきたいことがある。私はなにも人間の文明が進歩する
ことに反対しているわけではない。便利なことは、不便なことよりも
よいにきまつている。ただ、目先の欲望をすこしでも早く満足させる
ために、現在のように遠い将来までを見ようとしないで環境をこわ
しつづけてゆく。すると、これが人間にとつて最高の環境だと胸を
張ったときに、そこがじつは人間にとつて最適地でもなんでもなく、
人類の墓場だったということがあると言いたいのだ。

目的を達するためには多少の犠牲もしかたない、というような考え
をすて、まわり道でも時間をかけて目的に進むのだ。そのために
環境をみずから破壊するような愚かなことは避けようではないか。
まわり道をするのもまた、がまんの一つだ。そして、ある程度がまん
のあるような状態こそ、生物社会にとつてもっとも健全で、長つづき
する状態なのだ。

（宮脇昭「人類最後の日」）



トロンボーンのアズモが親指をたてて「いけるね」と合図してき
た。アズモに答えたとともに、会場が見えた。観客の一人、一人の顔
が見分けられる。

お母さんは正面の二階席最前列にいた。「あそこにいたか」と克久
がちらりと視線をやった。隣りは今朝まだ名古屋から戻っていないかっ
たお父さんだ。久夫と百合子が並んでいるのは意外だった。それか
ら、克久は何かを「あれ」と感じた。そのあれが何なのかは解らない
が、二人が初めて並んで座っているのを見たような気がしたのだ。例
えて言えば同級生が花の木公園でデートをしているのを目撃したよう
な感じだった。両親はいつもより若々しかった。

それは一瞬の閃光だった。

曲名と学校名を紹介するアナウンスが会場に入った。指揮台わき
に滑り込むようにたどりついた森勉が、実に素早く息を整えた。アナ
ウンスが終わると同時に、ベンちゃんの息をきらしていた肩は、静か
になった。指揮台上がった時には、数秒前まですばしっこく走り
回っていたのがうそのようだ。有木と目が合う。指揮棒が振り上げら
れた。高く澄んだクラリネットの音が観客をしつかりつかまえた。

ティンパニが静かに鳴り響く。

「交響曲譚詩」は無難にこなした。祥子がマリンバの位置に移動す
るほんの数秒のことだ。会場は水を打ったようだ。再び指揮棒が
振り上げられた。

ティンパニが静かに打ち鳴らされ、チューバなどの低音グループが
最初の主題を奏で始めた。克久は真つ直ぐに立っている。立っている
けれども、既に身体は音楽の中に吸い取られていた。何か、大きなも
のに包まれる感覚だった。

そこにあるものは、目に見えるものではなかった。が、克久は全身
で、そこに確かにある偉大なものに参与していた。入るとか加わると
か、そういう平たい言葉では言い表せない敬虔なものであった。感情
というようになつげなものではなくて、人間の知恵そのものの中
に、自分が存在させられていた。それが参与ということだ。

低音グループが奏でた主題に木管が加わり、音の厚みが増す。やが
てティンパニがクレシェンドで響いた。それを木管楽器たちが優しく
清らかな歌で迎えた時には、克久の胸の中にあの大きな夕陽があかあ
かと燃えた。いつも、そこで大きな夕陽が現れる。もちろん、克久は
ただ音楽に酔っていたわけではない。指揮棒はたえず、音が加わるべ
き位置の指示を出していたし、拍は正確に数えられていた。部員だけ
に解る伝令が走り回っていた。それでも、あかあかとした夕陽は決し
て克久の目の中から消えなかった。夕陽の周囲に見慣れた団地の眺め
があり、それが斜めに射す陽の光を受けて、尊いものとして輝きを帯
びた。克久は音の中にそういうものを見ていた。

曲は長い尾を引いた孔雀の優美な歩みや、青く光る首の動きを表し
ながら進んでいく。克久はホルンがタタタタン、タタタタンと、
草原に吹く風の音を奏でる間に、トライアングルをかまえた。ベン
ちゃんの眉毛が今だと告げる。克久が打ち鳴らすトライアングルの
涼やかな音を聞き逃してしまふ観客もいることだろう。しかし、それ
は決して欠くことができない重要なディテールだ。

一つの重要な仕事を終えた彼は、おごそかな足取りで大太鼓の前に
進んで行く。まったく彼の足取りはおごそかとしか言いようのないも
のだ。たとえ、その足が三カ月以上一度も洗ったことのない上履きを
はいていたとしても、重要な儀礼に参与する司祭のおごそかさを邪魔
するものではなかった。

曲はクライマックスをめざし、正確に進行していた。少しも間違い
がないとは言えない。小さなミスは、それぞれにすり傷、切り傷と
なつてしみ込んでいたが、痛みを訴える暇はなかった。今、ここだと
いう指示が指揮棒の先から飛んだその瞬間に、克久は大太鼓を一
発、十分に抑制して打ち込んだ。もう一発、重要な部分がある。その
指示は指揮棒からはこない。ベンちゃんの眉毛がここだぞとその
打ち込むべき位置を教えた。克久の一発に続いて、マアさ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

んがシンバルを華やかに響かせた。孔雀がその羽を震わせながら開く時の光そのものが、マアさんのシンバルの音だった。すかさず金管が高らかに孔雀の羽の輝きを繰り広げる。

金管が華やかに孔雀の大きく広げられた羽そのものを表現した中へ、あの夕暮れの風のようなホルンが通り過ぎていき、ティンパニが最後を力強く締めくくった。次の瞬間、すべての音は完全に消え失せると同時に、威勢をほこった孔雀の姿も消えた。

四十七人の部員と一人の指揮者がいる。

拍手が湧き起こるより先に、四十七人の部員は、ただの中学生に
戻る。

克久は中学校を卒業するまでの間に何度となくこの不思議な瞬間を経験することになるが、最初に経験したのはこの時だった。

夢から覚めるといようなあいまいなものではなかった。この世界

には敬虔に参与すべき何かがあることが明快に身体で解る場所がそこにあつた。そこから大事なものは隠されてしまっている場所へ戻った

ということだ。大事なものは隠されてはいるが、克久はその痕跡をしつかり握っていた。だから、ホルンのロビーで久夫から「上手だな」と言われた時、妙にしらけた気持ちになった。久しぶりに見る

父親の顔だが、克久はあまりうれしそうな顔はできなかった。

「俺、ちよつと、二発目の大太鼓の入りが遅れたから。まずかった」「いや、うまいよ。上手だよ」

久夫に言われるほど、克久はしらけてしまう。そのしらかたは地区大会で百合子に「小学生とはぜんぜん違う」と言われた時の、それほどじゃないという感じとは違った。久夫に「うまい」と言われるほど、克久の満足した気持ちにこつていくような感じだった。

(中沢けい「楽隊のうさぎ」)



その日は土曜で、俊亮が帰ってくる日だった。お民と次郎は、めいめいに違った気持で彼の帰りを待っていた。

次郎は薪小屋に一人ぼつねんと腰をおろして考えこんでいた。そこへ、お糸婆さんと直吉とが、代わる代わるやって来ては、お父さんのお帰りまでに、早く何もかも白状したほうがいい、といったようなことをくどくどと説いた。もうみんなも、次郎を算盤の破壊者と決めてしまっているらしかった。

次郎は彼らに一言も返事をしなかった。そして、父が帰って来て母から今日の話を聞いたら、きつと自分でこの小屋にやって来るに違いない。その時何と言おうか、と考えていた。

(何でおれは罪をかぶる気になったんだろう。)

彼はその折の気持が、さっぱりわからなくなっていた。そして、いつもの押しの強さも、皮肉な気分もすっかり抜けてしまった。彼は自分で自分を哀れつぽいもののようにすら感じた。涙がひとりで出た。――彼がこんな弱々しい感じになったのはめずらしいことである。

ふと、小屋の戸口にことごと音がした。彼は、またかと思つて見向きもしなかった。だれもはいって来ない。しばらくたつと、また同じような音がする。何だか子供の足音らしい。彼は不思議に思つて、そのほうに目をやった。するとなかば開いた戸口に、俊三が立っている。

(ちくしょう！)

彼は思わず心の中で叫んで、唇を噛んだ。

しかし何だか俊三の様子が変である。右手の食指を口に突っこみ、ややうつ向きかげんに戸口によりかかつて、体をゆすぶっている。ふだん次郎の眼に映る俊三とはまるでちがう。

次郎は一心に彼を見つめた。俊三は上眼をつかつて、おりおり盗むように次郎を見たが、二人の視線が出つくわすと、彼はくるりとうしろ向きになって、戸によりかかるのだった。かなりながい時間がたった。

そのうちに次郎は、俊三にきけば、算盤のことがきつとはつきりするにちがいない、ひよつとするとこわしたのは彼なのかもしれない、と思つた。

「俊ちゃん、何してる？」

彼はやさしくたずねてみた。

「うん……」

俊三はわけのわからぬ返事をしながら、敷居をまたいで中にはいったが、まだ背中を戸によせかけたまま、もじもじしている。

次郎は立ちあがって、自分から俊三のそばに行った。

「算盤こわしたのは俊ちゃんじゃない？」

「……………」

俊三はうつむいたまま、下駄で土間の土をこすった。

「僕、だれにも言わないから、言つてよ。」

「あのね……」

「うむ。」

「僕、こわしたの。」

次郎はしめたと思つた。しかし彼は興奮しなかった。

「どうしてこわしたの？」

彼はいやに落ちついてたずねた。そしてさつき自分が母にたずねられたとおりのことを言っているのに気がついて、変な気がした。

「転がしてたら、石の上に落っこちたの。」

「縁側から？」

「そう。」

「お祖父さんの算盤つて、大きいかい？」

「うん、このぐらい。」

俊三は両手を七八寸の距離にひろげてみせた。次郎は、いつの間にか、俊三が憎めなくなっていた。

「俊ちゃん、もうあつちに行つといで。僕、だれにも言わないから。」

俊三は、ほつとしたような、心配なような顔つきをして、母屋のほうに去った。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

そのあと、次郎の心には、そろそろとある不思議な力がよみがえって来た。むろん、彼に、十字架を負う心構えができあがったというのではない。彼はまだそれほど俊三を愛していないし、また、愛しうる道理もなかった。俊三に対して、彼が感じたものは、ただ、かすかな憐憫の情に過ぎなかったのである。しかし、このかすかな憐憫の情は、これまでいつも俊三と対等の地位にいた彼を、急に一段高いところへ引きあげた。それが彼の心にゆとりを与えた。同時に、彼の持ち前の皮肉な興味が、もくもくと頭をもたげた。自分でやったことをやらないとがなばって、母を手こずらせるのもおもしろいが、やらないことをやったと言いつつ、母がどんな顔をするかを見るのも愉快だ、と彼は思った。いわば、冤罪者が、獄舎の中で、裁判官を冷笑しながら感ずるような冷たい喜びが、彼の心の隅で芽を出して来たのである。

彼はもうだれもこわくはなかった。父に煙管でなぐられることを想像してみたが、それさえ大したことではないように思えた。むしろ彼は、これからの成り行きを人ごとのように眺める気にさえなった。そして、今度母に詰問された場合、筋道のとおった、もつともらしい答弁をするために、彼はもう一度薪の上に腰掛けて考えはじめた。

もうその時には日が暮れかかっていた。小屋はしだいに暗くなってきた。そろそろ夕飯時である。しかし、お糸婆さんも、直吉も、それつきりやって来ない。このまま放っておかれるんではないかと思うと、さすがにいやな気がする。かといって、こちらからのこのこ出て行く気には、なおさらなれない。

（父さんはもう帰ったかしらん。帰ったとすればこの話を聞いて、どう考えているだろう。父さんまでが、もし知らん顔をして、このままいつまでも僕を放つとくすると、――）

次郎はそう考えて、胸のしんに冷たいものを感じた。そして、次の瞬間には、その冷たいものが、石のように凝結して、彼をいよいよよかんこにした。

（下村湖人「次郎物語」）



会話で基本的なのは、自分の考えや感情をうまく伝えることだ。もし会話に「秘訣」というものがあるとすれば、それはこの点にある。自分の考えと感じたことを口に表せて、はじめてあなたはその会話に加わっていると言える。

このことは常識と言えるけれども、実際の会話では実行できなくて、だから会話が生氣を帯びてこない。反対に私たちは自分の考えや感情を隠して喋ることが多くて、いつの間にか、自分の考えや感情を口に言い表せなくなっている。そういう傾きがある。自分はどう感じるか、自分はどう考えるか——これが会話意識の中心であるべきなのに、相手はどう感じているのか、どう考えているのか——この方向に意識が働きがちなのである。

自分の考えや感じたことを言い表すことは欧米の会話の原則だが、この明るい原則の裏側にある意識も彼らは十分に開拓している。すなわち、自分の考えを表明するのではなくて隠すために喋るという意識である。

「欺そうとして黙っていることと、欺そうとして喋るること——この両方を見わけねばならぬ。」とヴォルテールは言っている。

私たちの間では、「都合の悪いことは言わない」という会話常識がある。欺そうとして、黙っているという方向だ。それほど意識的でなくとも、黙っていることで隠そうとする傾きがある。しかし西洋の会話では、相手が黙る時はなにか隠していると勘ぐる人が多い。そこで逆に積極的に嘘を喋って本当のことを隠そうとする。時にはそれが人の習性となることもある。それでヴォルテールはまた言っている

——「人は自分の本当の考えを隠すためにのみ会話をを用いる。」と。

実際、たいていの人々は互いの本当の考えや気持ち隠して喋りあい、それを会話と呼んでいるとも言える。そんなやり取りが大部分を占めるのかもしれない。しかしそんな浅い層をもって会話を代表させたり、その層での技術や喋り方を教習したりするのは、本書の目的ではない。やはり、「自分の心を聞いて語る人こそ、あなたを喜ばす人だ」というジョンソン博士の言葉を第一としたいが、そこに至る前にまあもう少しこの浅い層の会話相を語ろう。

「人の頭脳は、ひとつのことを言いつつ他のことを考えるくらい、

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

わけのないことなのだ」(ピュブリリウス・シルス)

これはすでにローマ時代の発言であり、以来、西欧の知性人は、考えることと口にすることとの分裂を意識しつつ現代に至っている。私たちと比べて彼らはずっと、思ったことをすぐ口にする傾向なのだが、それでも思ったことを口にして人を傷つけることには、彼らなりに用心する。

私たちは「思わず口が滑った」と言う。英語ではそれを a slip of the tongue と言い、ともに「滑る slip」で一致しているのは面白い。心に隠しておいた考えがいつ口に出てしまう時、私たちはそれになんか寛大であり、ゆるしたり無視したりするが、欧米人の会話では、そのスリッパを許さないことが多い。その場で追求するか、憶えていてあとでトツチめるかする。彼らの心は一般に鋭く働き、批判的な見方をしがちだ。それを剥きだしに言えば相手の感情を傷つけると知っていながら、なかなか舌の働きを押さえられない。

「会話の秘訣はなにか——自分の言うべきことを心得るという点ではなくて、自分の言つてはならぬことを心得ておくという点である」(無名氏)

こんな言葉が戒めとなるのも、彼らの口が滑りがちだからで、自分の考えを伝えるにしろ、隠すにしろ、とにかく喋るのである。その気持ちだけは押さえられない。当然に、言つてはならぬことへの自制を欠いてスリッパしがちなのだ。

このことは私たちの側から考えるとさらに明瞭になる。

私たちは言つてはならぬことを意識しすぎて自制し、その結果、黙りがちとなり、会話が活発にならず、それで互いが退屈する。そういう傾向のほうがつよい。会話では上下の関係、家庭では夫婦の間、学校では教師と学生の間、そういう関係にはこの意識がまだ強く残っている。

私たちは遠慮深さや慎みのかげに隠れて、都合のわるいことを言わずにすまず。自分の心にある気持ちを明かさずにすまず。知らん

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ぶりをする。相手に忠告することのできる時にも、しないですます。いつしか自分の心を開いて話す習慣を見失ってゆく。こういったネガティブ（否定的・消極的）な面を発達させている。

それでこの無名氏の「言つてはならぬことを心得よ。」という警句は、私たちには必要でない。私たちは「言つてはならぬこと」を忘れるようにすべきだ。なぜなら意識的にせよ無意識的にせよ、私たちは常にこの警告を念頭にもつからだ。むしろ「言つてはならないこと」という心の枠を大はばに取り去つても、毒念さえなければ相手を傷つける恐れがないのだ。

まずそういう心のなかの「枠はずし」によつて、生きた会話の復活にむかいたい。

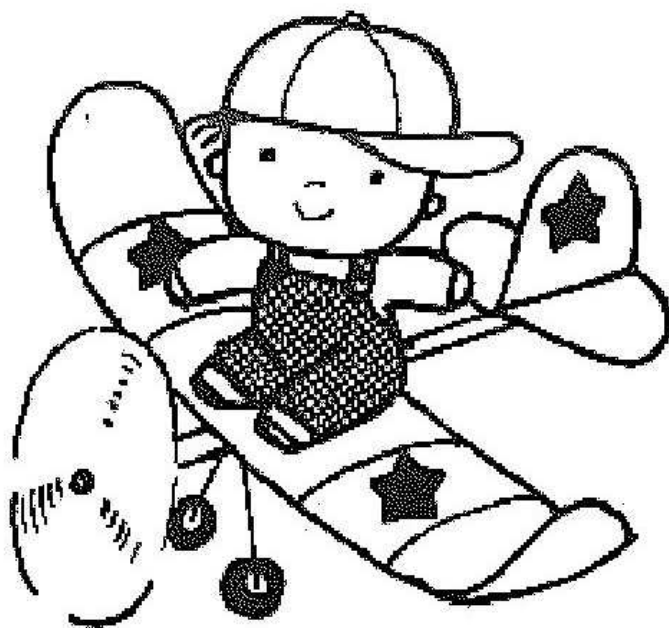
私たちの「口をつつしむ」心は美德から来ている。私たちのほうが外国人よりもずっと会話の礼儀をわきまえ、自我を押さえる自己訓練ができている。調和を考え、遠慮し、用心深く、相手にいやな思いをさせまいとする。そういう社会的訓練もできている。社会的に洗練されていて、時には（彼らの目から見ると）痴呆的なほど自己主張や自己顕示の欲望を表に出さない。私たちのこういう心性の高さは彼らには分らない。分らせるには、私たちはうんと喋って彼らにそれを知らせるほかないという矛盾が生じる。

彼らに私たちの礼儀や心くばりを態度で伝えることはとても不可能であり、仕方がないのでこちらが彼らのほうにおいてゆく。お喋りの仲間に加わるほかない。そして彼らの「会話」に加わるとなれば、それは町の「英会話学校」での会話よりもっと率直な「会話」となるべきなのだ。そしてここまできると、かえつて、私たちの会話は上質なものとなるだろう。なぜなら、調和や慎重ぶかさど率直な明快な表現力が融合して、それこそ「会話」をする人の大きな魅力がそこに発揮されるからだ。

（加島祥造「会話を楽しむ」）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



それにしても、五億冊というのはおどろくべき数字である。世界広しといえども、これだけの量の本がつくられ、そして消費されている国は、そうたくさんはない。おそらく、日本人は、世界中で最もよく本を読む民族なのである。

そして、つくられ、消費される本の量以上に注目すべきことは、このように大量の書物が日本では家庭の中にまでとけこんでいるという事実である。四大家族で年に十二冊、五年で百冊、とにかくちよつとした「蔵書」が、たいていの家庭でできあがっているのだ。

もちろん、西洋の家庭にも多少の書物がないわけではない。しかし、わたしの見たかぎりでは、ふつうの家庭の場合、書物はたとえば暖炉のうえに数札の小説がのつている、という程度のものであつて、何十冊も何百冊もが本棚を埋めているのは、かなり知識人の家庭にかざられている。

実際、家庭用の本棚をこんなに多種類とりそろえて家具売り場で売っている国は、世界でおそらく日本だけだ。アメリカでもヨーロッパでも、もし家庭用の本棚というものがあるとすれば、せいぜい、サイドボードぐらいのものであつて、数十冊を収容することなど、どういでもきそうもない。本棚は、よほど特殊な場合は別として、家庭の標準備品ではないのである。

ところが、日本の家庭にはたいてい本棚がある。規模の大小は別として、ともかく「蔵書」がある。たとえば書斎はなくても、廊下のつきあたりとか居間の壁ぎわとかに本棚があり、全集ものがならんでいる。それが平均的な日本の家庭の風景なのだ。書物のない家庭は日本にはない。

これと対照的に西洋の家庭で気がつくのは、やたらに大型のグラフ雑誌などがゆきわたっているという事実だ。どこの家に行っても、アメリカなら、たとえば『ライフ』のような雑誌が居間の机の上に、必ずといってよいほど積み重ねてある。しかし、それは日本の家庭ではあまり見かけない風景だ。事実、日本のグラフ雑誌は、だいたいお医者さんや床屋さんの待合室の備品であつて、家庭の備品にはなりにくいのである。

それでは、書物を備品とする日本の家庭とグラフ雑誌を備品とする西洋の家庭とは、どちらがうのだろう。第一にいえることは、グラフ雑誌がその読まれ方、あるいは見られ方において集団的であるということだ。居間のソファに腰をおろして、主婦がグラフ雑誌を

開いているとき、夫や子どもは、それに「参加」することができる。グラフは、一種の絵本のようなものだから、それをのぞきこんでいっしよに見ることができるのである。ちようどそれはテレビを見ているようなもので、集団的なものである。

だが、書物となると、そういうわけにはゆかない。書物はひとりで読むものである。のぞきこんでいっしよに読むことは難しいし、第一、そんなことをされたら落ち着かない。たとえすぐそばにだれかがいても、読書というのは孤独な個人の行為なのである。

だから、日本の茶の間では、たとえば、主人が経営学の本を読み、主婦は文学全集を、子どもはマンガを、それぞれに黙って読んでい、といったような風景が出現する。一冊のグラフ雑誌をかこんで、家庭の全員が集団的になにかを見るのではなく、家族のそれぞれが、それぞれの本を通じて、それぞれの世界に没入している——それが日本の家庭における読書風景なのだ。

いささか飛躍するようだが、これはことによると、日本の住居に個室がないことと関係しているのかもしれない。どこにいても、家族と顔をつきあわせていなければならぬのだから、せめて本でも読んで、自分だけの精神の個室をつくりたい、という欲求が生まれるのである。ひとりひとりが個室をもっている西洋人が、居間のグラフ雑誌をかこんで集団的な世界をたのしむのに対して、もともとがべつたりと集団的な日本の家庭では、書物によって、個室的な世界を求めようとするのだ、といつてもよい。いつだったか、三畳ひと間に六人というひどい住宅環境を紹介するテレビ番組を見ていたとき、この六人の家族が、みな肩を寄せあつて、それぞれに本を読んでいた情景にわたしは打たれたことがある。

現実に個室が十分でないとき、人は、心理的な個室を、読書という方法で手に入れることができるのである。

（加藤秀俊「暮しの思想」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

本を読むことは、よいことだ。たとえば、それが住居のせまさが理由であつても、個人が自由な想像力によつて、それぞれの精神の個室を持つのはのぞましいことだ。実際、そもそも「個人」というのは、そういうふうにして成長してゆくものだからである。

しかし、家庭の中の書物というのを考えてみると、これはずいぶん、ふしぎな品物のような気がする。なぜなら本は家庭の備品のひとつではありながら、結局のところ、個人に属するものであるからだ。

家庭の本棚にならんでいる何十冊、あるいは何百冊の本の背表紙は、家庭のみんなが毎日ながめているのに、その中身は、家族共有のものではないのである。その点で、家庭にある他の多くの備品と書物とは、性質がちがうのだ。

それはそれでよい。ちようど、個室をのぞきこまないことが礼儀であるように、精神の個室ものぞきこまない方がよいのかもしれない。お互い、好きな本を読んで、それぞれの世界をたのしめば、それでよい、というべきなのかもしれない。

しかし、本は一方で個人に属するものでありながら、同時に、だれもが入ることのできる個室、つまりホテルの部屋のような社会性も持っている。だれかが使用中であるかぎり、そこにふみこんではならないが、空室になったときには、だれが使ってもかまわない。主婦が買いこんだ文学全集を夫や子どもが読むことはいつこうにさしつかえないことだし、子どものマンガを親が読んだつていい。表題はまったくくんぶんかんぶんであつても、夫の読んでいた経営学の本を、妻が読もうとしてみてもかまわないはずだ。

そして、わたしは、そういう密室の交換がこれからの家庭ではたいへん大事なことであるような気がする。

人間がことばで表現できるものは、きわめてかぎられている、と哲学者はいう。それは家族の中の間人間関係についても真実だ。夫婦、親子、毎日顔をつきあわせておしやべりは果てしなく続けられているけれども、それによつて、はたしてお互いがどれだけ「理解」しあっているかは、わからない。相手の心の深い部分が、どんな構造になつていてのかは、本当に、見当がつかないのである。

その見当のつかない部分を知ることにはできないし、また、知る必要もない。「個人」どうしのつきあいというのは、そういうもののなの

だ。しかし、もしも、その心の奥深い部分をつくつているもののひとつが書物であるとするならば、前にのべたような理由によつて、

お互いの書物を交換することが家庭の中で考えられてもよいの

ではないか。

書物を交換する、というのは、自分の体験した異質の世界を見せあう、ということなのである。そして、だれにでも経験のあることだろうが、自分が読んでみて、本当にいい本だ、と思つた本は、ひとつにも読ませたくないものだ。読んでいる間は、完全に自分だけの世界だが、その世界に、親しい人をひきずりこんで経験を共有したくなるのである。そういう経験の交換が、家族のそれぞれの読書生活の中でおこなわれるのは、すばらしいことだ。

ひとの日記や手紙を読むのは失礼なことだ。だが、書物は、一方で私的でありながら、他方では共有の許されるものである。夫婦の間で、あるいは親子の間で、お互いの本をとりかえて読むことで、家族は個人を尊重しながらも互いに理解を深めることができるかもしれない。

（加藤秀俊「暮しの思想」）



春、植木市がたつ。お寺の境内へ、かなりの商品が運びこまれ、ちよつとした市なのである。父は私にガマロを渡して、娘の好む木でも花でも買っちゃれ、という。汗むような、晴れた午後だった。娘がほしいといいたしたのは、藤の鉢植えだった。それは花物では、市のなかのお職だった。鉢ごとでちようど私の身長と同じくらいの高さがあり、老木で、あすあさつてには咲こうという、蕾の房がどつさりついてた。子供は、てんから問題にならない高級品を、無邪気にほしがったのである。子供だからこそ、おめず臆せずねだるが、聞かずとも知れる高値である。とてもガマロの小銭で買えるものではない。もちろん私は買う気などなくて、子供と藤の不釣り合いなおかしさを笑ってすませ、藤の代わりに赤い草花をどうかとすすめた。子供はそれらの花は、以前にもう買ったことがあるからとしりぞけ、小さい山椒の木を取った。お職の藤から一度に大下落の山椒だった。ほしいものが買ってもらえなくて、わざと安値のものをと嫌味にすねたのではない。彼女はさんしよの葉としらすぼしを、醤油でいりつけたのをごはんにはらばらとまき、お菜に玉子焼をつけたお弁当が、大好きだったからなのである。藤でなくても、山椒でも子供は無邪気に喜んでた。私もそれでよい、と思つてうたがわなかった。ところが、夕方書斎からでてきた父が、みるみる不機嫌になった。藤の選択はまちがってない、という。市で一番の花を選んだとは、花を見るたしかな目をもつていたからのこと、なぜその確かな目に応じてやらなかったのか、藤は当然買つてやるべきものだったのに、という。そういわれてもまだ私は気づかず、それでも藤はバカ値だったから、と弁解すると父は真顔になつておこつた。好む草なり木なりを買つてやれ、といいつけたのは自分だ、だからわざと自分用のガマロを渡してやった。子は藤を選んだ、だのになぜかつてやらないのか、金が足りないのなら、ガマロごと手金にうてばそれで済むものを、おまえは親のいいつけも、子のせつかくの選択

も無にして、平気でいる。なんと浅はかな心か、しかも、藤がたかいのバカ値のというが、いったい何を物差にして、価値をきめているのか、多少値の張る買物であつたにせよ、その藤を子の心の養いにしてやろうと、なぜ思わないのか、その藤をきつかけに、どの花をもいとおしむことを教えてやれば、それはこの子一生の心のうるおい、女一代の目の楽しみにもなるう、もしかたもつと深い機縁があれば、子供は藤から薦へ、薦からもみじへ、松から杉へと関心の芽を伸ばさないとはかぎらない。そうなればそれはもう、その子が財産をもつたも同じこと、これ以上の価値はない、子育ての最中にいる親が誰しも思うことは、どうしたら子のからだに、心に、いい養いをつけることができるか、とそればかり思うものだ、金銭を先に云々して、子の心の栄養を考えない処置には、あきれてものもいえない——さんざんにきめつけられた。

藤の代わりに買い与えた山椒が、叱られたあとの感情をよけいせつなくした。一尺五寸ほどの貧弱な木だが、鮮緑の葉は揉めば高い香氣をはなち、噛めば鋭い味をひろげ、棘は容赦なく刺した。誰のためにあがなった木だろうと、思わされた。だが、叱られたのは身にしみたが、さればといつてその後私が心を改め、縁日のたびに子に花の楽しさをコーチしたのではない。とかくルーズなのである。

子は大きくなつていった。花を見ても、きれいだというだけ、木を見ても、大きな木ねというだけ、植物にはそれ以上は心が動かないようだった。世話をし花を咲かすなどは、面倒そう。庭木の枯れ枝を一本切るにさえ、しぶりがちである。ほかには優しい心を持つほうなのだが、野良犬にふみ倒された小菊を、おこしてやろうともしない固さなのである。草木をいとおしまぬ女が、どんなに味気ないものか、子ながらうとましく思う時もあつた。話しても説いても、心が動かないようだった。それまでも私は、あの時の藤でチャンスを失つたらしいと、後悔することが度々あつたのだが、今更ながらこの責任は自分にある、とつらい思いをした。いくらつらく思つても、もうおそかつた。

年々四季はめぐる。芽立ち、花咲き、みのり、枯れおちる。そのことあるたびに心はいたんんだ。が、そのまま娘は人のもとへ縁付いた。孫がうまれた時、この子は草木をいとおしむ子になれど、ひそかに祈った。子に急ったことを、孫でつとめたいと思った。けれども、私のおもわくはがらりと外れた。いいほうに外れたのである。思いがけないことに、娘の夫は花を好み、木を育てようとする人だった。土をいじり、種をまいて喜ぶのである。子が生まれ、結婚生活が落ち着いてから、その趣味というか心柄というかが、やつと形になって現れはじめたのである。意外な感じがしたのだが、もつとも意外だったのは、そういう夫につれて娘もしみじみと花をみつめ、芽をいとおしむ気をもったことだった。ほつとして、私はもう孫のことでも安心した。

(幸田文「藤」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



急な下り坂をおりきったところに信号があつた。交差する大きな道路があるのだから信号機があるのは当然だが、下り坂で勢いのついた車を停めるには、少々無理がある。よほど早めにブレーキを踏まねばならない。もつとも、交通量は少ない道だが。

「この交差点で事故はおきないのかしら」

運転席の夫に言い終わるか、終わらぬうちに、急ブレーキをかける音と共に、車全体に鈍い振動が伝わった。バックミラーを見て夫はサイドブレーキを引き、直ぐに外に出た。ぶつかったのは五十CCバイク。高校生か。その子は転倒することもなく、バイクのハンドルに固定してみるミラーのゆがみを直しながら、我々の車の左側をするする走り抜けようとしたが、信号は赤である。

助手席の私が窓を開け、すぐ左隣に來たその子が痛そうに股間に手をやっているのを見て、「大丈夫？ 痛くしたんでしょ」と言うのと、夫が「おいっ、逃げるのか」と声を出したのと、ほとんど同時だった。

逃げるのか、と言われて男の子はむっとした表情になり、バイクにまたがったまま、両足で二輪車を押しもどして車の後にまわり、傷はつけなかった、と言った。ブレーキをかけていなかったわけではな

い。かけ方があまかった程度だから五十CCバイクがバンパーにぶつ

かっても車体に傷がつくことはない。

私はその子がかがをしなかったかどうかがまっ先に心配になり、夫はぶつかっておきながら挨拶もせずに行き過ぎようとした態度が面白

くなかった。「すいません」の一言を言わせて再びハンドルを握つ

た。私は走り出した車の窓から首を出し、「本当に大丈夫ね。痛いところはないのね。気をつけなきゃだめよ」と車から次第に遅れていく

子にどなるように言った。

夫がとっさに出した「おいっ、逃げるのか」という言葉に私はこたわっていた。あの子の気持ちの中に「逃げる」という意識はなかったと思う。「あつ、いけねえ。ぶつけちゃった。でも傷をつけたわけじゃないからかまわないだろう」と、軽い気持ちで通りすぎようとしただけのことだろう。きつい言葉で少年をなじる夫の心がうとましく思えた。

息子は高校二年の時、奥多摩有料道路で転倒し、反対車線のガー

ドレールにぶつかって気を失い、病院に運ばれた。同行の友人がかけたきた電話で事故を知り、あわてて病院にかけつけた時は、夕やみが色濃く人の顔も定かには分からぬほどだった。

病院の門をくぐるとかけ寄ってきた人影があり、それが友人の安川君で、彼はとぼしい外灯の明かりを背に顔をこわばらせて、「ハンドルを握っていたのは宮地君で、僕は後ろに乗っていた」とまず言つた。「あなたはけがをしなかったの」の問いに、すり傷だけだと言つてズボンをまくりあげ、血のにじんだ脛とすりきれたワイシャツからのぞいた右手の肘とを見せた。

「オートバイは弁償します」と言う安川君に、私は「とんでもない。あなたにけがまでさせてしまつてごめんなさい。いずれおわびにあがります」と言つて病室へ急いだ。

固いベッドに放り出されたような格好でうずくまっていた息子は、人の気配に薄目を開け、私の姿を認めて、「ごめんなさい」と言つたまま、ゲーゲーとはいた。もうずっとはき続けていたらしかった。私は、息子の背中を一晚中さすり続けた。明け方はき気が治まって眠りについた息子が、目を覚ましたのは昼近くである。もう安心と思うと私はむしように息子を責めなくなっていた。

「お友達にけがをさせるような無茶な運転はしないでちょうだい」

息子は驚いた顔で「運転していたのはあいつだよ。『あつ、石だ』って安川が言つたとたんに投げ出されていたんだ」と答えたまま急に口をつぐんで、あとは何をきいても黙して語らなかつた。

救急隊員に菓子折りを持って礼に行き、どちらが運転していたのでしょうと尋ねた。

「我々には分かりません。しかし、運転者があんな遠くまで放り出されることは、あまり例がありません」

私は安川君に激しい怒りをおぼえた。「ひきようね、逃げないでよ」ときつくとがめたい気分になつていった。翌々日、病院へ見舞いに來た安川君に私は自分を制しきれず、「あなたが運転していたんですつてね」と言つてしまった。彼は言葉をのんで、私にチラッと視線を走らせ、「じゃ、また来る」と息子に言つて部屋を出た。息子は暗い目をして私を非難した。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

「よけいなことを言わないでよ。あいつは十分に悪いと思っ
 だ。大人なんて、自分さえ気がすめば、それでいいんだね。これは
 僕たちのことなんだから、黙っててよ」

安川君が責任逃れをしようとしたのは確かだ。しかし逃げる人間を
 追及して何が得られるだろうか。たとえ安川君が運転者だったこと
 がはつきりしても、私が彼を責めて彼に反省をうながすことができる
 だろうか。十六才。事の善悪はわきまえている。

息子と安川君はその時を境に付き合いをやめた。親が付き合うなど
 言ったわけではない。彼らには彼らの常識があつたらしい。

「あなたが運転していたんですってね」という言葉が、どれほどあ
 の子の心に突きささったか。彼を責めた私は、あれ以来、自分を責め
 続けることになった。もう八年も前のことなのに、あの時から私は他
 人をなじる言葉に耳をおおいたくなっている。夫の「逃げるのか」の
 言葉の中に、私は冷酷とエゴしかないのを感じ、やりきれない気持ち
 だった。

やがて高速道路に入るまでの半時間あまり、夫と私はたがいに相手
 の態度を無言で非難しあっていた。挨拶できない年齢ではない。あの
 子に先ず礼儀をさとするのが当然だろうというのが、夫の言い分である
 ことは、相手が黙っていても私にはよく分かる。夫の方が先に折れて
 きた。「今度の休みに大菩薩へ登ろうか」。以前から私が行きたがつ
 ていたからである。しかし、私はいつものようにその言葉にすぐのる
 気にはなれなかった。再び二人とも黙りこんだ。速度制限オーバーを
 知らせるチャイムだけが、さつきからずつと鳴りつばなしたった。

(宮地真美子「ずれ」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



人間がこの世に生きて持ついろいろな体験は、人間の最大の教師だ。あることを目的として我々はそれを達成しようと試みる。そして失敗し、また成功する。その経験を、記憶の中で整理して知恵と呼ばれる理解力を得ることによって、類似した次の体験に我々は備える。その累積が何代も何代も続いて巨大なものに達したのが文化である。

技術的な知恵のうち簡単なものは、教育によって容易に伝えることができる。しかし、理論や道具や機械のようなものが複雑になると、それを授ける人受け取る人が限られ、そこに専門家が生まれる。技術的な知恵は専門家にまかせておいていいことがある。

肉体的なもの、心理的なもの、または道徳的、宗教的なものの伝授は、専門家のみで処理できない。乳の飲ませかた、子どもの育てかた、他人との交際の仕方、愛や悲しみの扱い方とその表現の仕方などは、あらゆる人間が、親や教師や先輩から受け取って、自分の生活の実質としなければならぬ。それ等を体得することは赤ん坊から大人になることであり、言わば動物から人間になることである。

自分と他人との触れ合いかた、自分の内部に起こる欲求や喜びや悲しみの調整の仕方は、人間であることの根本条件につながっているがゆえに、その処理を誤ることは、生存の危機となり、破壊となる。

我々の存在の外側にあるものは、特に専門的な知識や技能を必要とするものでない限り、我々はそれに慣れることができる。たとえば自転車に乗ることは、人間を疲労させるものとしても、人間は、必要なときだけそれに乗り、不必要な時はそれを使わずにいることができる。自転車は我々から離れてそこにあるものであり、我々はそれを必要な時だけ利用する。

しかし、自分の喜びや悲しみ、家族や勤務先の同僚などと接触せず生きていくことはできない。そういう事柄についての生き方の技術というべきものは利口な人間も利口でない人間もが、同じように学び取り、そして毎日を、毎時間をその処理に当たらなければならぬことである。その処理の仕方として、礼儀とか倫理という一般的なものがあ、さらにより深いところからその種のことに

ついでに真理的な安定を得る方法としての道徳、愛憎、恋愛、宗教の教理などがある。

そして我々が「体験」という言葉を、人間の生き方との関係において使うときは、このような体験のことを言う。そして宗教家や教育家が、我々を導くのもまたこのような部分においてである。この部分について、誰でもが自分の体験について何かの判断をしているものである。私の父は、田舎の村の収入役という目立たない仕事をしている人間であつたが、何度か私たちに向かつて言った。「人生というのは芝居をしているようなものだ。自分の当たつた役割りをうまくやる外はない」と。たしか、私のおぼろげな推定では、私の父は村長になりたかつたようである。その当時の村長は選挙でなく、前任者や村会議員たちの推薦によつて地方の長官から任命されたものであつた。父は内気な手固い人間であつたので、村長に推挙される機会がなく、収入役で終わった。そのことに対しての不満とあきらめの感情がこの言葉の中に漂っていることを、二十歳ぐらいのとき私は感じた。

（伊藤整「体験と思想」）



読解問題 1月4週分

問1 読解マラソン集2番「あなたはいい加減な人間だ」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本人の多くは「いい加減」という言葉に「適切な」という意味があることを知らない。
B 「好い加減」という言葉にはいくつか意味があるが、それらの意味には全く共通項がない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集2番「あなたはいい加減な人間だ」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本人のほとんどは、「よい加減」を好ましく思わない。
B 母親が「いい加減にしろ！」といって叱るのは、子供がいい加減な人間になってしまうのをおそれるためである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「あなたはいい加減な人間だ」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本人は、自然に敵対しながらも、自然を克服することは考えなかった。
B 自然を愛するということは、ありのままの自然を受け入れるということである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「あなたはいい加減な人間だ」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 日本人は、ただ自然に随順すれば自然が自分たちを受けいれてくれるとは考えていない。
B 「いい加減」という言葉は、世界のどの言葉にも訳すことができない、日本人独特の表現である。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集1番「昔、夏に食べたトマトは」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 昔のトマトは青臭いがおいしかった。
B ハウス栽培された野菜には味の薄いものが多い。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「ドイツにエーレンベルグという」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 単植栽培の適地と混植栽培の適地は、おおむね一致している。
B 競争相手のいない強い植物も、弱い植物と助け合って生きている。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「エーレンベルグは、」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A 人間の欲望がすべて満足させられるような社会は、人間にとっての生理的最適域と言える。
B 人間は、欲望をある程度がまんすることによって、社会を進歩発展させてきた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「エーレンベルグは、」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

- A すべての欲望が満足されるような強い植物は、ほぼ永遠に繁栄することができる。
B 人間にとって満足できる環境は、植物にとって満足できるものではない。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 2月4週分

問1 読解マラソン集5番「トロンボーンのアズモガ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「部員だけに解る伝令が走り回っていた」というときの伝令とは、人間のことはない。

B 演奏会場の窓からは、大きな赤い夕陽が見えた。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「トロンボーンのアズモガ」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 克久が感じている敬虔とは、演奏を聴きにきてくれた観客に対する気持ちである。

B 久夫に「うまい」と言われて、克久の満足した気持ちにがにこったのは、久夫の言葉が本心からとは思えなかったからである。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「その日は土曜で、」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 次郎が戸口に立っている俊三に初めて気がついたとき、「ちくしょう！」と思ったのは、真犯人が俊三だと気づいたからである。

B 次郎は、俊三の話聞いたあと、自分が算盤を壊したことにしようと思った。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「その日は土曜で、」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 次郎は、心の中で、俊三を許すことができなかった。

B 真犯人が俊三だとわかって、次郎は興奮した。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「会話で基本的なのは、」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 会話には、喋ることによって本当のことを隠そうとする働きもある。

B 日本人は、西洋人に比べて、相手に遠慮しながら話すことが多い。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「会話で基本的なのは、」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 日本人は、「口が滑る」ことに寛大だが、欧米人はより批判的だ。

B 日本人は、都合の悪いことでもすべて相手に打ち明けることが多い。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「それにしても、五億冊というのは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 読書は、日本人にとって心理的な個室である。

B 日本人は、世界中で最もよく本を読む民族である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「それにしても、五億冊というのは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A アメリカの家庭では、居間にはグラフ雑誌が置いてあることが多い。

B 日本の家庭では、居間でグラフ雑誌のかわりにテレビを見る人が多い。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 3月4週分

問1 読解マラソン集9番「本を読むことは」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

■本は個人に属するものであるが、家族みなが交換し、共有できるのがよい。
1 ○ 2 ×

問2 読解マラソン集9番「本を読むことは」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

■日記や手紙と同様、書物も私的なものであり、それを読むのは失礼なことだ。
1 ○ 2 ×

問3 読解マラソン集10番「春、植木市が立つ」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

■欲しい花を買ってもらえないことに拗ねた子どもは欲しくもない山椒を選んだ。
1 ○ 2 ×

問4 読解マラソン集10番「春、植木市が立つ」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

■植物にさして興味がない娘を変えたのは彼女の夫であった。
1 ○ 2 ×

問5 読解マラソン集11番「急な下り坂をおりきったところに」を読んで次の問題に答えましょう。

次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

■バイクの少年は謝ることなく逃げたため夫になじられた。
1 ○ 2 ×

問6 読解マラソン集11番「急な下り坂をおりきったところに」を読んで次の問題に答えましょう。

次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

■私は、安川君への怒りを思い出し、会話をする気にもなれず黙り込んだ。
1 ○ 2 ×

問7 読解マラソン集12番「人間がこの世に生きて持つ」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

■我々の存在の外側にあるものには慣れていくことができる。
1 ○ 2 ×

問8 読解マラソン集12番「人間がこの世に生きて持つ」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

■利口な人は、生き方の技術も持ち合わせている。
1 ○ 2 ×

1～3月

小1 コード：nane パ ス： PDF	小2 コード：nane パ ス： PDF	小3 コード：nane パ ス： PDF
小4 コード：nane パ ス： PDF	小5 コード：nane パ ス： PDF	小6 コード：nane パ ス： PDF
中1 コード：nane パ ス： PDF	中2 コード：nane パ ス： PDF	中3 コード：nane パ ス： PDF
高1 コード：nane パ ス： PDF	高2 コード：nane パ ス： PDF	高3 コード：nane パ ス： PDF